



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道帝国大学へ進学した東京女子大学生たち
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 5, 76-103
Issue Date	2010-03-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43384
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_76-103.pdf



< 研究ノート >

北海道帝国大学へ進学した東京女子大学生たち

山本 美穂子

はじめに

北海道大学と東京女子大学を結びつける人物として、新渡戸稲造(札幌農学校第2期生、東京女子大学初代学長：1918-1923)に比して、佐藤昌介(札幌農学校第1期生、東京女子大学初代理事：1917-1922)を思い浮かべる人は稀であろう。北海道帝国大学初代総長(1918-1930)の佐藤昌介は、帝国大学総長という立場にありながら、女子高等教育の向上を訴え続け、帝国大学における男女教育機会均等を高らかに宣言していた稀有な存在であった¹⁾。

戦前、最高学府である帝国大学は、制度的に女性の入学を想定していなかった。1918年大学令に基づき設立した官立・私立大学も同様であった。戦前期における大学は、原則として、男子の高等普通教育機関(高等学校・大学予科)の卒業生が入学できた。女性は高等学校・大学予科に入学できなかったため、大学進学ルートからはずれていた。女性が中等教育機関(高等女学校)の卒業後に進学できた上級学校は、女子高等師範学校(東京・奈良)か女子専門学校²⁾であった。

にもかかわらず、北海道帝国大学では、総長佐藤昌介の主導のもとで、女性の入学が実現した。1918年9月農学部が選科生(現在の科目等履修生)として、1930年4月理学部が学生として女性の入学を認めたのである。1930年新設の理学部では、1930年3月18日制定の「北海道帝国大学理学部規程」第9条で、入学資格に、女子高等師範学校本科理科卒業生、理科に関する専門学校卒業生、中等教員免許状所有者と明記した。これらは、いずれも、女性が有資格者であることを意味した。これにより、1930～45年にかけて、北海道帝国大学理学部には23名の女性が入学した³⁾。そのうち5名は東京女子大学出身で、理学部数学科に入学した。結城玉江(1935年)、小林よし(1937年)、桂田芳枝(1940年)、渡邊雅(1941年)、大久保多津(1945年)である⁴⁾。彼女たちも亦、北海道大学と東京女子大学を結びつける人物であるが、その名を思い浮かべる人は極めて少ないであろう。

そこで、本稿では、近代日本における女性の帝国大学進学実態の研究調査の一環として、戦前期⁵⁾、北海道帝国大学理学部数学科に進学した東京女子大学生たちを紹介することとする。巻末には、2009年9月7日北海道大学大学文書館において、東京女子大学同窓会の来館を記念して企画・実施した資料見学会「東京女子大学と北海道大学を結ぶ人々ー佐藤昌介・新渡戸稲造を中心にー」の配布パンフレットを補訂の上、参考資料として供する。

1. 戦前期における帝国大学理学部への女性の入学状況——出身校に着目して——

1-1. 北海道帝国大学理学部（1930～45年）

まず、1930～1945年、北海道帝国大学理学部に学生として入学した女性たちの出身校を確認しておこう。1930～1945年理学部に学生として入学した23名の女性たちの出身校は、(1) 日本女子大学校 8名、(2) 東京女子高等師範学校 5名、(3) 東京女子大学 4名が上位3校を占め、全体の74%にあたる（表1）。

表1 1930～45年北海道帝国大学理学部への女性入学者数（学科・出身校別）

出身校／進学学科	数学科	物理学科	化学科	植物学科	動物学科	地質学 鉱物学科	計
東京女子高等師範学校	2			2		1	5
奈良女子高等師範学校					1	1	2
日本女子大学校	3	3	1		1		8
東京女子大学	4						4
東京女子薬学専門学校				1			1
大阪府女子専門学校			1				1
中等教員免許状所有者	1					1	2
計	10	3	2	3	2	3	23

備考 前掲『北海道大学大学文書館年報』第1号（18～57頁）に、『東京女子高等師範学校一覧』より補訂した。

東京女子高等師範学校からは、理科卒業者が、植物学科・数学科・地質学鉱物学科に、日本女子大学校からは、①高等学部理科卒業者が動物学科・化学科に、②家政学部第二類卒業者が物理学科・数学科に進学している。日本女子大学校、東京女子高等師範学校からは入学先の学科にばらつきがみられる一方で⁶⁾、東京女子大学からは数学科への入学のみであることが特徴的である。数学科への入学者10名のうち、東京女子大学卒業生は4名を数え、最多を占めた。東京女子大学在学中に難関の「文検」（文部省教員検定試験）に合格して中等教員免許状を取得し、理学部を受験して合格した1名（桂田芳枝）も含むと、東京女子大学は理学部数学科へ5名もの進学者を輩出したこととなる。

これは、東京女子大学が、女子専門学校の中で唯一、数学専門の課程「数学専攻部」（修業年限4年、1927年設置）を有していたからに他ならない。東京女子大学に数学専攻部の設置をみたのは、「之れは其初め高等学部⁷⁾の生徒中に数学に多大の興味を有する者のあるのを発見し、数学の主任阿部八代太郎先生に御依頼して、是等の生徒に特に数学研究の機会を与え、昭和二年四月終に数学専攻部を新設したのである」⁸⁾という、東京女子大学学長安井哲の数学研究・教育への深い理解と英断による。

東京女子大学数学専攻部は、1937年には、宿願であった「数学」の中等教員無試験検定を文部省より許可された。数学専攻部が文部省から「数学」の中等教員無試験検定の許可

を得るまでの苦節を、安井哲は次のように回想している⁹⁾。

(数学専攻部は) 年々文検に合格する者の数を増すに至つたのであるが、私立の専門学校にて数学の無試験検定の特権を有するものは男子の唯一校(東京物理学校)あるのみであるので、女子の専門学校には其例なしとして無試験検定の特権を得るに時日を要し、それが為めに一時生徒の意気を挫きたるやの感を与へし事はあつたが、後進の為に特権を得んとして、元気を恢復し互に協力して文検の準備をなし奮闘した結果、年々合格者の数を増すに至つたのである。かくして終に昭和十二年三月以降の卒業生より無試験検定の特権を与へられる様になつたのである。此間に於ける先生方と生徒の忍耐と努力とは実に涙ぐましい者があつたのである。

東京女子大学数学専攻部の「数学」の中等教員無試験検定の許可は、東京物理学校(男子専門学校)に次いで2校目であり、女子専門学校としては初めての快挙であつた¹⁰⁾。そして、この東京女子大学数学専攻部生たちの奮闘が、その後、帝国大学理学部数学科への進学へと結びついていくこととなる。

1-2. 東北・大阪・九州・名古屋帝国大学理学部 (1913~45年)

他の帝国大学理学部への女性の入学状況を確認してみると、東京女子大学数学専攻部出身者の実力は殊更に明かとなる。当時、女性に学生として入学を認めていた帝大理学部には、東北帝国大学、九州帝国大学、大阪帝国大学、名古屋帝国大学の4理学部があつた。各理学部への女性入学者数は表2のとおりである。

北海道帝国大学理学部とほぼ同時期に新設された大阪帝国大学理学部では、数学科への女性の入学は5名あつた。そのうち3名が東京女子大学数学専攻部卒業生である。さらに、2名(1937年理学部数学科入学)は、「数学」の中等教員無試験検定の許可を受けた1937年数学専攻部卒業生(黒崎千代子、丸茂信)である¹¹⁾。また、名古屋帝国大学では、戦時期、1942年理工学部から分離独立した理学部に、5名の女性が入学した。そのうち2名は、東京女子大学数学専攻部卒業生(長田貞江、石川文江)であつた¹²⁾。

一方、東北帝国大学理学部数学科は、化学科と共に、帝国大学で女性の入学を受け入れた嚆矢である。しかしながら、1913年に牧田らく(東京女子高等師範学校1911年卒業)が入学した後¹³⁾、1914~1922年の9年間、1930~1943年の13年間には女性の入学が見られなかった。実際、東北帝国大学理学部数学科への女性の入学は、1920年代に7名(1923年3名、1924年2名、1925年1名、1929年1名)と偏っている。女性の入学が見られなかった1930年代は、東京女子大学数学専攻部が卒業生を送り出した期間と重なっており、東北帝国大学理学部数学科への進学がないというのは不自然に思われる。「当時は東北大学では、数学科や物理学科は女性をとらないと噂で聴いていました」という証言もあり¹⁴⁾、1930年代、東北帝国大学理学部数学科は、女性に門戸を閉ざしていたという可能性も否定できない¹⁵⁾。また、そのような噂を聴いていた女性たちが、東北帝国大学以外の帝国大学を探し求めて、すなわち1930年代初頭に新設された北海道帝国大学や大阪帝国大学に進路を求め

た可能性がある。

表2 1913～45年東北・大阪・九州・名古屋帝国大学理学部への女性入学者数（学科・出身校別）

進学先学科／帝国大学	東北帝国大学	大阪帝国大学	九州帝国大学	名古屋帝国大学
理学部開設年	1911年 (理科大学)	1931年	1939年	1942年 (理工学部より独立)
女性の入学を認可した年	1913年	1931年	1939年	1942年
規程上、女性を入学資格に明記した年	1925年	1931年	1939年	1942年
女性が初めて入学した年	1913年	1935年	1942年4月	1943年
数学科	10 東京女子高等師範学校 8 奈良女子高等師範学校 1 日本女子大学校 1	5 第三臨時教員養成所 1 東京女子大学 3 東京女子高等師範学校 1	1 第三臨時教員養成所 1	4 東京女子大学 2 不明 2
化学科	4 東京女子高等師範学校 2 日本女子大学校 1 北平師範大学 1		2 帝国女子薬学専門学校 1 神戸女子薬学専門学校 1	1 日本女子大学校 1
物理学科	1 東京女子高等師範学校 1			
生物学科	10 東京女子高等師範学校 3 奈良女子高等師範学校 3 帝国女子医学薬学専門学校 2 帝国女子理学専門学校 2 浙江大学 1			
地球物理学科	1 東京女子高等師範学校 1			
計	26	5	3	5

注1 上段の数値は各大学・各学科への女性の入学者数、下段は出身校別の入学者数（内数）。

注2 各帝大の『帝国大学一覽』をもとにしたデータに、①東北大学史料館永田英明氏より提供いただいた調査データ、②『大阪大学二十五年誌』（1956年）・大西愛「戦前の女子入学と大阪大学—中野富子氏に聞く—」（『大阪大学史紀要』第3号、1983年11月、70～76頁）、③『九州大学七十五年史』別巻（1992年）、『九州大学理学部同窓会名簿』（1966年）等より補訂した。日本女子大学成瀬記念館、東京女子大学同窓会、大阪大学文書館設置準備室、名古屋大学大学文書資料室・理学部同窓会に協力いただいた。

2. 北海道帝国大学理学部に進学した東京女子大学生たち

前述したように、1930～45年にかけて、北海道帝国大学理学部数学科には、結城玉江（1935年）、小林よし（1937年）、桂田芳枝（1940年）、渡邊雅（1941年）、大久保多津（1945年）の5名が、東京女子大学数学専攻部より進学した。入学当時の報道、入学前の教育環境と入学の経緯などを中心に紹介していくこととする。

2-1. 結城 玉江（ゆうき たまえ）

1935年4月、北海道帝国大学理学部数学科に、結城玉江が入学した。1935年度数学科の入試（第二次募集¹⁶⁾）は志願者7名、合格者6名であった。理学部数学科にとっては、結城玉江は最初の女性入学者であった。同年4月16日付『北海道帝国大学新聞』は、「一人の合格もない植物科／数学に紅一点／理学部入学者発表」と見出しをかかげ、「数学科に

は女子大学を昨年卒業した結城玉江さんが美事パス紅一点の華を添えてゐる」と報道するほどであった。

一方で、1931年東京女子大学数学専攻部卒業の豊泉しげが「働き乍ら聴講にでも行かして貰いたいと思つて幾つ学校（男子の大学）の門を叩いたか分からない。勿論何処も見向きもしなかつた。たゞ一つ物理学校（今の理科大学）だけが聴講を許した¹⁷⁾と回想しているように、北海道帝国大学理学部の入試情報が得られなかった女性は多かつたと思われる。1934年東京女子大学数学専攻部卒業の結城玉江がどのように入試情報を得るに至ったのか、その入学動機や経緯は現時点では不明である。結城玉江は、数学科在学中は河口商次教授につき幾何学を専攻していたと考えられる。1938年理学部を卒業した結城玉江は、その後、新潟女子高等学校などで教鞭をとり、数学教育者の道を歩んだ。

2-2. 小林 よし（こばやし よし）

1937年4月27日付『北海道帝国大学新聞』は「又紅二点を加へた／理学部の合格者／第一次で定員超過の化学科」と見出しをかかげ、数学科合格者名簿に、「上中雪子（日本女大）小林よし（東京女大）」と報道した。上中雪¹⁸⁾は日本女子大学校師範家政学部1935年卒業生、小林よしは東京女子大学数学専攻部1937年卒業生である。ふたりは1937年度数学科の入試（第二次募集）を受け、合格者5名中に入った。

小林よしは、1915年6月20日、小林光と美津の長女として生まれた。父の光は麻布中学校英語教諭であった¹⁹⁾。祖父の光泰（1858-1899）は長野県師範学校を卒業後、小学校教諭を経て、カナダ人宣教師C.S. イービから1878年受洗し、1885年麻生教会初代専任牧師を務めた人物であったことから²⁰⁾、小林家は厳格なプロテスタントの家庭でもあった。

小林よしは、北海道帝国大学理学部への入学について、次のように、語っている²¹⁾。

北大が女子に門を開いているのは農学部でずっと昔からやっていたから²²⁾理学部が出来た時から知っていました（略）「出願の決心」は東京女子大に入学する前からです。「受験準備」と云っても今のようにむつかしくなかつたので過去の入試問題集を見た位です

この回想から、小林よしは、東京女子大学入学前から、帝国大学進学を志していたことがわかる。小林よしの帝国大学進学への強い決意は、東京女子高等師範学校附属高等女学校に在学していながら、あえて東京女子高等師範学校に進学していないところにも現れている。東京女子高等師範学校は3～4年級では数学選修という選択があつたが、1～2年級は共通必須科目を修得せねばならず、卒業後は高等女学校等への奉職が義務づけられていた。そのため、小林よしにとっては、東京女子大学数学専攻部のほうが、数学を集中的に学ぶことができ、帝国大学理学部数学科への受験にも備えられる最適な教育環境であつたのである。

表3 小林よし（1915-2005）略年譜

1933年	東京女子高等師範学校附属高等女学校 卒業
	4月 東京女子大学数学専攻部 入学
1937年	3月 東京女子大学数学専攻部 卒業
	4月 北海道帝国大学理学部数学科 入学
1940年	3月 北海道帝国大学理学部数学科 卒業
	3月 北海道帝国大学理学部 副手（～1942年9月）
1946年	4月 岐阜市立女子商業学校 教諭（～1948年3月）
1948年	4月 北星学園 教諭（～1950年3月）
1950年	3月 北海道立札幌北高等学校 教諭（～1960年8月）
1960年	8月 私立東京文化学園 講師（～1963年3月）
1963年	4月 私立成蹊高等学校 教諭（～1978年3月定年退職）
1978年	4月 私立豊島高等学校 講師（～1980年3月）

備考 清川郁子氏からの寄贈資料に拠る。

東京女子大学数学専攻部に進学した小林よしについて、同級生だった大久保多津は、「小林よしさんは、お茶の水（東京女子高等師範学校附属高等女学校）から来た、本当に頭のよい人でした。休み時間は、トランプなどで遊ぶ同級生たちにも加わらず、いつも勉強していました。いつでも本を抱え、図書館でも勉強していた人でした」²³⁾と回想している。

北海道帝国大学理学部へ入学後、小林よしは守屋美賀雄教授のもとで代数学（整数論）を研究した。1940年3月小林よしの理学部卒業に際して、1940年3月17日付『小樽新聞』は、「新学士の抱負／まだ研究へ／未来を夢見る彼女達」と題して、次のように報道した。

三年の間よしさんは代数正数論を雪子さんは解析学一般を専攻したがどちらも学友の男性たちを吃驚させる頭脳の良さで、卒業後もそのまゝ、此处で仲よく一緒に研究を続け行かうとかたい決意を申合わせた彼女たちである。

小林よし、上中雪は、理学部卒業後も共に副手として研究を続けた。1941年、小林よしはイデアル論に関する論文“Eine notwendige Bedingung für die eindeutige Primfaktorzerlegung der Ideale in einem kommutativen Ring.”を、守屋教授と連名により発表する。同論文は、整数論の権威 高木貞治の推薦により、*Proceedings of the Imperial Academy*, Vol.17（『帝国学士院紀事』第17巻）に掲載され、彌永昌吉より「可換環で任意のイデアルが一



図1 理学部数学科・物理学科の女性たち（1939年頃）
後列中央が小林よし、後列右端が上中雪（大学文書館蔵）

意的に素イデアル分解されるための必要十分条件を久保氏（久保啓二）よりも簡単に出された」と高く評価された²⁴⁾。その後、小林よしは、1942年9月理学部数学科助手の清川誠一と結婚し、戦後は札幌北高等学校・成蹊高等学校等で長く教鞭をとって、数学教育者の道を歩んだ。

2-3. 桂田 芳枝 (かつらだ よしえ)

1940年4月、北海道帝国大学理学部数学科に、桂田芳枝²⁵⁾が入学した。

桂田芳枝にとって、北海道帝国大学理学部数学科の入学までの道程は長いものであった。桂田芳枝は、1911年9月、北海道余市郡赤井川村に生まれた。父の桂田徳太郎は小学校校長、姉の静枝は小樽高等女学校教諭を務めるなど、教育家の家庭に育った。1929年小樽高等女学校卒業後、数学研究を志して上京、1931年東京物理学校で4年間聴講生として学び、1935年には姉の静枝の紹介で北海道帝国大学理学部数学科の河口商次教授のもとに勤めながら学んだ。勤務中、理学部では、数学科に結城玉江（1935年入学）が、物理学科にも1936～37年に3名もの女性が入学し、大きな刺激となった。遂に桂田芳枝は北海道帝国大学理学部への受験に向けて、中等教員免許状を取得するために1938年東京女子大学数学専攻部へ入学するに至った。桂田芳枝は数学専攻部在学中の1939年「文検」（文部省教員検定試験）に合格し、理学部の入学資格である中等教員免許状所有者となった。そこで、1940年度理学部数学科の入試（第二次募集）を受けたところ、1度目の受験にして合格を勝ち得た。理学部入学後は、河口教授のもとで幾何学（微分幾何学）を専攻した。

1942年9月理学部卒業後、桂田芳枝は、小林よしや上中雪²⁶⁾と同様に、副手として教室にとどまり研究を続けた。理学部数学科へ新たに女性が入学する時には歓迎会を主催したり、ノートを貸与するなど、後輩の女性たちを気遣う人でもあった²⁷⁾。

1944年以降、桂田芳枝は河口教授が主宰するテンソル学会の機関誌『テンソル Tensor』や、『北海道大学理学部紀要』に論文を発表し続けた。1945年助手に採用され、1950年7月には“On the operations of extensors referred to a non-holonomic system in a space of higher order.”において、北海道大学から理学博士（旧制）を授与された。数学分野での理学博士は、桂田芳枝が日本初であった。その後、桂田芳枝は1950年11月助教授に、1967年教授に昇任した。桂田芳枝の教授昇任は、北海道大学にとって初めての女性の教授の誕生でもあった。



図2 理学部数学科の女性たち（1943年）
前列右端が桂田芳枝
（大学文書館蔵）

表4 桂田芳枝（1911-1980）略年譜

1929年	3月 小樽高等女学校補習科師範科 卒業
1931年	東京物理学校聴講生（～1935年）。同校教授森本清吾（旧姓 深澤）より個人指導を受ける。
1938年	4月 東京女子大学数学専攻部 入学
1939年	文部省教員検定試験に合格、中等教員免許状を取得
1940年	4月 北海道帝国大学理学部数学科 入学
1942年	9月 北海道帝国大学理学部数学科 卒業
	北海道帝国大学理学部数学科 副手
1945年	北海道帝国大学理学部数学科 助手
1950年	7月 理学博士（北海道大学） 学位論文：“On the operations of extensors referred to a nonholonomic system in a space of higher order.”
	11月 北海道大学理学部数学科 助教授
1967年	北海道大学理学部数学科 教授（～1975年4月）

備考 前掲『桂田芳枝博士小伝』、前掲『近代日本女性史 科学』に拠る。

2-4. 渡邊 雅（わたなべ まさ）

1941年4月、北海道帝国大学理学部数学科に、渡邊雅が入学した。渡邊雅は、小林よしと同じく、東京女子大学数学専攻部1937年卒業生であった。

渡邊雅は、東京府立第六高等女学校卒業後、1933年東京女子大学数学専攻部へ進学した。1937年同大学卒業後は、東京物理学校に聴講生として通い、北海道帝国大学理学部数学科の受験勉強に励んでいたという²⁸⁾。1941年4月理学部数学科の入試（第二次募集）に、渡邊雅は第一番目に願書を提出するほど強い決意で挑んだ²⁹⁾。1941年理学部入学後は、功力金二郎教授のもとで解析学を専攻し、日本女子大学から入学した大杉富美子³⁰⁾と共に学生生活を送った。1943年9月理学部卒業後、渡邊雅は結婚して家庭に入った。



図3 クラーク像の前にて
（1941年頃）

左が大杉富美子、右が渡邊雅
（大学文書館蔵）



図4 理学部数学科の学生たち（1941年）

前列左端が渡邊雅、中列左端が大杉富美子（大学文書館蔵）

2-5. 大久保 多津 (おおくぼ たつ)

1945年4月、北海道帝国大学理学部数学科に、大久保多津が入学した³¹⁾。大久保多津も、小林よし・渡邊雅と同じく、東京女子大学数学専攻部1937年卒業生であった。

大久保多津は、1917年2月4日、新介とコウの長女として東京赤坂で生まれた。農家出身である父の新介は志を立てて上京して、商社員となっていた。新介は自身が受けることができなかつた高等教育を、自分の子ども達に受けさせたいという願いから、非常に教育熱心であった。「しっかり勉強しろ」と言う父親のもとで、大久保多津は幼稚園児の頃から、「自分は(日本)女子大学へ行くんだ」と思っていた。当時は、1918年設置の東京女子大学はまだそれほど知られていなかったという。

表5 大久保多津 略年譜

1933年	3月 東京府立第六高等女学校 卒業
	4月 東京女子大学数学専攻部 入学
1937年	3月 東京女子大学数学専攻部 卒業
1938年～	東京府立第五高等女学校をはじめ、府内の高等女学校等で教諭として働く
1945年	4月 北海道帝国大学理学部数学科 入学
1948年	3月 北海道大学理学部数学科 卒業
	4月 東京都立富士高等学校 (東京都立第五女子高等学校) 教諭

備考 杉多津氏からの聴き取り調査に拠る。

大久保多津は、幼少時から数理判断に優れて、算術が大得意であった。東京三田の東京府立第六高等女学校に入学した後も、数学の成績は自然と良かったという。高等女学校卒業後の進路には、東京女子大学を選んだ。その理由は、日本女子大学校には数学科がなく、東京女子大学は数学専攻部を設置していたからである。東京女子大学数学専攻部に進学すると、府立第六高等女学校の同級生だった渡邊雅がいた。東京女子大学数学専攻部1937年卒業クラスについて、大久保多津は次のように回想している。

中等教員無試験検定への受験勉強で、1935年秋頃から、皆が真剣になりました。もともと、「粒ぞろい」だと先生に言われていたクラスでした。翌年の春頃から、「帝大を受ける！」と周りの同級生たちが言い出し、結局、阪大へは2人、北大へは1人行き、東北大へは行きませんでした。

数学専攻部では、阿部八代太郎講師、平野雪枝教諭(東北帝国大学理学部数学科1926年卒業)のもとで、このクラスを対象に、毎週試験を実施し、夏休みを返上して講習会も開催、授業を改良し特別授業を行なうなど、教員資格無試験検定取扱への認可を目指して、「スパルタ教育」を施していた³²⁾。学生と教員の努力が実り、1937年文部省は同専門部に中等教員無試験検定を許可した。無試験検定の勉強を重ねてきたこともあり、数学への向学心を燃やした大久保多津たちのクラスからは、卒業後に帝国大学へ進学した者が相次いだ。1937年卒業直後には、小林よしが志望通りに北海道帝国大学理学部数学科に入学、大

久保多津の大親友であった丸茂信と黒崎千代子は大阪帝国大学理学部数学科に入学した。

大久保多津自身は、1937年数学専攻部を卒業後、東京府内の私塾や高等女学校などで数学を教えていた。同級生の帝国大学での学生生活を聞き、大阪に引っ越した丸茂を訪ねたこともある。1941年、やはり同級生の渡邊雅が、北海道帝国大学理学部数学科に進学したことを知り、それまで募らせていた帝国大学への憧れと「数学を勉強したい」という意欲を抑えることができなくなった。「気が付いたら、彼女（渡邊雅）も北大にいったという。私も（自分の進学熱を）このまま否定したくはなかった。食べ物や着物は両親が出してくれていたもので、働いて得たお金で、『私はこのお金で帝大へ行く！』と両親に言ったのです」という。未知の土地、北海道への憧れもあり、北海道帝国大学の受験を父親に相談したところ、父親は娘の帝国大学受験を大歓迎し、1945年大久保多津を北海道帝国大学へ送り出した。



図5 大久保多津（1951年）
（杉多津氏より提供、『東京都立富士高等学校第三回卒業記念』より転載）

1948年功力金二郎教授のもとで解析学を専攻して卒業した大久保多津は、東京都立富士高等学校（前 第五女子高等学校）の教師として再び教壇に立った。

むすびにかえて

1939年6月5日、佐藤昌介（1856-1939）が逝去した。北海道帝国大学は、札幌農学校在学時に受洗しメソジスト教会員であった佐藤昌介のために、戦時下にもかかわらず、キリスト教式で大学葬を執り行った。東京女子大学同窓会から葬儀に参列した上田歡子³³⁾は、同窓会誌に北海道支部の近況を伝えると共に、次のように佐藤昌介を追悼した³⁴⁾。

北海道支部として大きな――事件は佐藤先生の御逝去の事でした。先生は支部開会式の時御出で下さいまして、私達の先生となつて下さり、孫のやうにかわいがつて下さいました。（略）学校にをりました時よりはかへつてお親しく甘へて何かと御相談に伺つてゐたのでした。そして私達は佐藤先生が同窓会に関係して下さる事をほこりとしてをりました。（略）今度安井先生に伺へば女子大学創立の時に安井先生を女高師にお迎へに行つて下さつたのは長尾先生と佐藤先生との事でした。とても――大切なお役をして下さつた事を知りました。「私は安井さんと進退を共にする」とよくおつしやつた事を思ひ合されます。

佐藤昌介は、1916年12月、東京女子大学設立に際して、長尾半平と共に安井てつを東京女子高等師範学校応接室に訪ねて、学監就任の人事交渉にあたった³⁵⁾。1917年から5年間は、帝国大学総長という重責の傍らで、東京女子大学理事として東京女子大学を支え続けた³⁶⁾。安井哲は、「学校³⁷⁾に深い同情を有つて居られた」と佐藤昌介を悼んだ³⁸⁾。

そのような佐藤昌介にとって、1935年結城玉江が、1937年小林よしが、東京女子大学から北海道帝国大学理学部へ進学したことは、とりわけ感慨深いものであったに違いない。

〔注〕

- 1) 拙稿「佐藤昌介の女子高等教育論——北海道帝国大学における女性の入学をめぐる——」(『北海道大学大学文書館年報』第3号、2008年3月、18～42頁)を参照されたい。
- 2) 戦前、文部省は女子大学の設置を認可しなかった。そのため、日本女子大学校(1901年創設)や東京女子大学(1918年創設)が「大学」を称していても、いずれも女子専門学校であった。
- 3) 拙稿「北海道帝国大学理学部における女性の入学」(『北海道大学大学文書館年報』第1号、2006年3月、18～57頁)を参照されたい。
- 4) 本稿では敬称を略す。
- 5) 1945年12月の閣議で1946年度以降は高等教育機関における男女共学制が了解され、1946年度入試より実施された。なお、北大では1946年度の女性入学者は0名であった。また、旧制大学としては1950年入学(1953年卒業)を最後とするため、現在、1947～50年度入学実態についても調査している。
- 6) 東京女子高等師範学校の理科(修業年限4年)では、3～4年級で①数学、②物理及化学、③植物及動物を選修した。日本女子大学校では、家政学部第一類(同、1931年家政学部を改組)が家政学を主たる目的とする一方で、家政学部第二類(修業年限4年、1931年師範家政学部を改組)は、数学・物理学・化学を基礎科目に据えた。家政学部第二類は、「純粹理系」と称された。このような出身校(女子高等師範学校・女子専門学校)における選択可能な専攻、教科目の違いによって、進学先の帝大の学科に差異をうみだしている。このような特徴・差異を生み出した教育的背景は、現在、資料調査・聴き取り調査中のため、論じることは今後の課題としたい。
- 7) 東京女子大学が、旧制高等学校に準じる課程として設置していた「高等学部」(修業年限3年、1921年設置)卒業生は、「大学部」(修業年限3年〔1927年に2年から延長〕、1921年設置)へ進学することを期待されていた(『東京女子大学五十年史』1968年を参照)。
- 8) 安井てつ「創立二十五年の回顧」(『東京女子大学同窓会月報』第9巻第3号、1943年6月、5頁)。
- 9) 前掲「創立二十五年の回顧」(『東京女子大学同窓会月報』第9巻第3号、5頁)。()は引用者に拠る。
- 10) 当時、東京女子大学は、①高等学部、②大学部のほかに、3つの専攻部を有していた。①英語専攻部(修業年限4年〔1935年予科1年・本科3年に変更〕、1921年設置)、②国語専攻部・③数学専攻部(修業年限4年〔1935年予科1年・本科3年に変更〕、1927年設置)である。特に、これらの専攻部は、①は1926年に、②は1931年、③は1937年に中等教員無試験検定が文部省より許可されるほど、その実力が証明されていた(前掲『東京女子大学五十年史』を参照)。
- 11) 杉多津氏(1937年東京女子大学数学専攻部卒業、旧姓 大久保)からうかがい、『大阪帝国大学一覽』掲載の学生名簿、『東京女子大学同窓会月報』掲載の卒業生名簿により確認をとった。
- 12) 『名古屋大学五十年史 通史一』(1995年、691頁)は、「雑件綴 教務課」を典拠として「東京女子大学予科卒」と記載しているが、正しくは2名の最終学歴は東京女子大学数学専攻部卒業である。長田貞江は1942年、石田文江は1943年数学専攻部を卒業している。『会報』(東京女子大学数専会)掲載の卒業生名簿より確認した。
- 13) 当時は、東北帝国大学理科大学数学科。
- 14) 1938年北海道帝国大学理学部へ進学した、日本女子大学校卒業生からの聴き取り調査に拠る。
- 15) 森本治枝(東北帝国大学理学部数学科1924年入学、1927年3月卒業)の回想録によると、1923年森本は、東北帝国大学理学部物理学科を受験しようとした際、理学部長(小林巖教授;物理学科)より、

- ①物理学科必須の暗室実験を男女組で行わせることが問題であること、②最近、同学科教授の男女交際が問題視されていることから数学科への受験に変更するよう説得された。結局、森本は数学科を受験している。1923年時点で、東北帝国大学理学部では、女性が入学した後の男女交際を危惧し、回避策として門戸を閉ざす学科が出ていたものと考えられる。なお、森本治枝自身も、理学部数学科助手の深澤清吾（1900-1954、数学者）から交際を申し込まれたことだけで、指導教官である林鶴一教授の激怒をかってしまったという。その後、森本治枝は卒業後の1927年6月東京で深澤清吾と結婚し、女子専門学校等で数学教育者として活躍した（森本治枝『ある女性数学者の回想』（九州大学出版会、1995年）、江角ヤス・酒井十代・富田はる・森本治枝「座談会 東北帝大女子学生のころ」『数学セミナー30ans』（1992年6月、81頁）を参照）。
- 16) 理学部の入試は、「理学部規程」に基づき2段階で行われた。第一次募集は予科・高等学校卒業者が対象であった。第一次募集で定員が満たない場合に限り、第二次募集を実施した。第二次募集では、高等師範学校・女子高等師範学校卒業生、理科に関する専門学校卒業生、中等教員免許状所有者が入学資格者であった。
 - 17) 豊泉しげ「数学専攻部創立当時を省みて」（東京女子大学同窓会数専会『会報』阿部先生追悼号、1957年、7頁）。
 - 18) 上中雪については山下愛子編『近代日本女性史 科学』（鹿島出版会、1983年、174～180頁）に詳しい。
 - 19) 後に麻生中学校教頭、YMCA 英語学校長。
 - 20) 小林よし、小林光、小林光泰の略歴は、清川郁子氏より寄贈いただいた資料に拠る。小林光泰については『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年、534頁）に詳しい。
 - 21) 林恒子氏から提供いただいた、1994年12月31日付林恒子宛て清川よし書簡に拠る。北海道女性史研究家の林恒子氏は、当時、入学動機など6つの質問を清川よし（旧姓 小林）に書簡で問い合わせしており、北大への女性の入学について調査していた。
 - 22) 1918年加藤セチが、1920年本間ヤスが、北海道帝国大学農学部で全科選科生として入学したこと。
 - 23) 杉多津氏からの聴き取り調査に拠る。
 - 24) 「研究時報」『科学』第11巻第12号、26頁。（ ）は引用者による補注。小林よしのこれらの業績については、山元周行氏より御教示いただいた。
 - 25) 桂田芳枝については、山下愛子編『近代日本女性史 科学』（鹿島出版会、1983年、163～173頁）、小山心平『桂田芳枝博士小伝——エルムの森に咲いた数学の精——』（北海道青少年叢書17、北国に光を掲げた人々、北海道科学文化協会、1999年）に詳しい。
 - 26) 上中雪は、在学中は功力金二郎教授のもとで、解析学（特に数学基礎論）を専攻した。卒業後は、1940年3月より理学部数学科研究補助を嘱託され、1941年4月から副手として勤務した。1944年助手に任用され、1949年3月辞職して帰京した。（唐澤隆三氏からの聴き取り調査、前掲『近代日本女性史 科学』176頁に拠る）。
 - 27) 溝口百合子氏（1943年理学部数学科入学、旧姓 池田）からの聴き取り調査に拠る。
 - 28) 唐澤隆三氏（1941年理学部数学科入学、東京物理学校出身）からの聴き取り調査に拠る。
 - 29) 大杉富美子は、在学中は守屋美賀雄教授のもとで代数学を専攻した（唐澤隆三氏からの聴き取り調査に拠る）。
 - 30) 帝国大学簿書No00125「入退学関係綴 昭和十六年度」（北海道大学大学文書館蔵）。
 - 31) 杉多津氏からの聴き取り調査に拠る。
 - 32) 『東京女子大学数学専攻学科50年の歩み』1977年を参照。
 - 33) 東京女子大学高等学部を1924年に卒業、同大学大学部英文学科を1926年に卒業した、東京女子大学創設期を知る初期の卒業生である。1932年頃より在札し、1939年当時は札幌市外琴似村に在住。

- 34) 上田歎子「北海道より」『東京女子大学同窓会月報』第5巻第9号 (1939年11日発行、15～16頁)。
- 35) 青山なを『安井てつ伝』岩波書店、1949年、215～216頁。
- 36) 前掲『東京女子大学五十年史』252頁。
- 37) 東京女子大学。
- 38) 前掲「創立二十五年の回顧」(『東京女子大学同窓会月報』第9巻第3号、5頁)。

〔謝辞〕

資料調査・聴き取り調査にあたり、2005年度より多くの皆様に御協力いただいている。2009年9月7日資料見学会を契機として東京女子大学同窓会の皆様とも交流が深まっている。清川郁子氏、中山久子氏、溝口百合子氏、杉多津氏、阿蘇慶子氏、小橋安紀子氏、猪野絢子氏、一柳やすか氏、里村秀子氏、井上早苗氏、早川希尹子氏、山岸みどり氏、唐澤隆三氏、山元周行氏、日本女子大学成瀬記念館、東京女子大学同窓会、東北大学史料館、名古屋大学大学文書資料室、名古屋大学理学部同窓会、大阪大学文書館設置準備室の皆様、厚く御礼を申し上げます。

(やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員)

《 参考資料 》

1. 資料見学会の挨拶——資料見学会パンフレットより——

資料見学会「東京女子大学と北海道大学を結ぶ人々——佐藤昌介・新渡戸稲造を中心に——」は、戦前期に東京女子大学と札幌農学校・北海道帝国大学に関わった人物の資料を通して、両大学の結びつきを考えるための展示企画です。

東京女子大学創設の際に理事として重要な役割を果たした佐藤昌介は、札幌農学校第1期生であり、当時は北海道帝国大学総長でした。また、東京女子大学初代学長の新渡戸稲造は、札幌農学校第2期生で卒業後は教授を務めました。二人は札幌農学校在学中に、外国人教師から英語学・英文学・キリスト教などを通して西洋の思想・文化を学び、さらにアメリカなどへの留学で知見を広め、女子教育について先進的な見解を持つようになりました。彼らが東京女子大学創立に関わることになった思想的な原点には、札幌農学校で受けたこうした教育があると言えます。さらに、札幌農学校で佐藤や新渡戸から教えを受けた小谷武治、木村徳蔵、芳賀鉄五郎が、後に東京女子大学の教壇に立つことになります。

一方、佐藤は北大に女性を入学させることも主張していました。戦前の帝国大学は制度的に女性の入学を想定しておらず、帝大総長でありながら女性への門戸開放を唱えた佐藤の存在は極めて異色であったと言えます。奇しくも東京女子大学設立と同年の1918年、北

大最初の女性入学者が誕生します。

さらに、佐藤の尽力により北大への女性の入学の道が開き、戦前期に25名の女性が農学部と理学部に入学します。そのうち、結城玉江（1935年）、小林よし（1937年）、桂田芳枝（1940年）、渡邊雅（1941年）、大久保多津（1945年）の5名は東京女子大学出身で、いずれも理学部数学科に入学しました。桂田芳枝は卒業後も北大で数学を研究し、1967年には旧帝大初（北大でも最初）の女性の教授となりました。

佐藤昌介と新渡戸稲造が切り開いた東京女子大学と北海道大学の結びつきは、単に両大学の友好関係を示すにとどまりません。両大学の結びつきは、近代日本において女性の高等教育機会拡大のために人々が行動し実現していった、という大きな歴史的な文脈として捉えることができます。

2. 資料見学会の構成 —— 資料見学会パンフレットより ——

I. 東京女子大学設立に関わった佐藤昌介・新渡戸稲造
1. 思想を形成した札幌農学校在学時代
(1) 札幌農学校への入学
(2) 学生生活
2. 教育者の道を歩む
(1) 札幌農学校教授 佐藤昌介
(2) 札幌農学校教授 新渡戸稲造
3. 世界を闊歩する
II. 両大学の架け橋～東京女子大学へ、北海道帝国大学へ
4. 東京女子大学を支えた札幌農学校卒業生たち
(1) 小谷武治
(2) 木村徳蔵
(3) 芳賀鋏五郎
5. 北海道帝国大学に入学した東京女子大学出身者たち
(1) 佐藤昌介の女子高等教育論と結城玉江の理学部数学科入学
(2) 理学部数学科への入学者～小林よし、桂田芳枝、渡邊雅、大久保多津～
補遺 筆墨～佐藤昌介、新渡戸稲造～

3. 人物紹介——資料見学会パンフレットより——

佐藤昌介 (さとう しょうすけ)

1856年岩手県花巻生まれ。1876～80年札幌農学校第1期生としてW.S.クラークらに学んだ。卒業後、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学留学などを経て、札幌農学校教授となり農業経済学を専攻、「殖民学」「農政学」等を開講した。1894～1930年には校長・学長・総長として北大運営の中樞を担った。東京女子大学設立に際して1917年に日本人理事5名のひとりとして参画し、長尾半平と共に、女子高等師範学校教授の安井てつを学監に招聘するために尽力した。

このほか、北星女学校（札幌）、遺愛女学院（函館）の設立などの女子教育事業にも関わった。また、制度的に女性進学を前提としていなかった帝国大学の門戸開放を主張し、東京女子大学出身者5名を含む25名の女性が戦前期の北大へ入学する道を開いた。



(大学文書館蔵)

新渡戸稲造 (にとべ いなぞう)

1862年岩手県盛岡生まれ。1877～81年札幌農学校第2期生として学んだ。アメリカ・ドイツ留学などを経て札幌農学校教授となり、「農業史」「殖民史」等を講じた。また、私財を投じて遠友夜学校を設立し、貧困家庭の子ども、特に教育に恵まれない女兒に勉学の機会を開いた。札幌農学校離任後は台湾総督府高官、第一高等学校長、京都・東京両帝国大学教授などを歴任した。東京女子大学設立に参画し、1918～23年に初代学長を務めてその礎を築いたが、国際連盟事務次長へ転出するに当たって安井てつに後事を託し、名誉学長に就任した。女子教育について多くの評論を執筆し、1927～33年には札幌農学校時代の教え子森本厚吉が設立した女子経済専門学校（後の東京文化学園）の初代校長も務めた。



(大学文書館蔵)

小谷武治（おたに たけはる）

1872年北海道生まれ。1892年札幌農学校予科入学、1893年本科進学、1897年に卒業論文「北海道牧羊来景」を提出して第15期生として卒業した。卒業後、療養中の新渡戸稲造が最初の著書『農業本論』を執筆するのを助けた。その後、大阪・鹿児島・岡山などで師範学校・農学校・中学校等の教師となり、一時期は台湾で技師も務めた。1918～20年東京女子大学幹事として英語を担当した。東京女子大学離任後は北海道帝国大学予科教授を務めた。



（附属図書館蔵）

木村徳藏（きむら とくぞう）

1875年宮城県石巻生まれ。1894年札幌農学校予科に入学し、1897年本科進学、1901年に卒業論文「瓜哇北海道移民増減論」を提出して第19期生として卒業した（同期に有島武郎、森本厚吉らがいいた）。アメリカのコロンビア大学留学後、台湾総督府中学校教諭、神戸女学院教頭などを経て、1921～28年に東京商科大学（現在の一橋大学）予科教授を務めて生物学を担当した。東京商大予科教授時代に東京女子大学で講師を務め、自然科学を講じた。



（大学文書館蔵）

芳賀鉄五郎（はが くわごろう）

1873年山形県鶴岡生まれ。1892年札幌農学校予科に入学し、1897年本科進学、1903年に卒業論文「瓜哇薯ノ各位置ニ於ケル生産力トノ関係」を提出して第20期生として卒業した。アメリカ・イギリスに留学して園芸学を修め、1907～20年台湾総督府技師として園芸試験場などに勤務した。ジャワ島、セイロン島で実業に携わった後、帰国して晩年の1928-30年に東京女子大学講師を務めた。



（大学文書館蔵）

桂田芳枝（かつらだ よしえ）

1911年北海道生まれ。高等女学校卒業後、北大理学部数学研究室の雇を経て、1938年東京女子大学数学専攻部に入学し、1940年に改めて北海道帝国大学理学部に入学した。1942年卒業後、数学研究室助手となった。1950年に学位論文“On the operations of extensors referred to a nonholonomic system in a space of higher order.”で数学分野最初の女性理学博士となり、助教授に昇進した。さらに1967年には数学幾何学講座の教授に昇進し、旧帝大では最初の女性教授となった。



（大学文書館蔵）

4. 資料見学会資料目録

4-1. 陳列資料目録

I	1-(1)	1	佐藤昌介の入学願書 (1876年6月24日) 文書/大学文書館蔵 (札幌農学校簿書047-7)
			佐藤昌介は、1876年夏、東京外国語学校在学中、開拓使が東京英語学校 (東京大学予備門の前身) より北海道行の志望者を募る事を W.S. クラークの演説で知り、札幌農学校への入学願書を提出した。
I	1-(1)	2	佐藤昌介の入校証書 (1876年7月14日) 文書/大学文書館蔵 (札幌農学校簿書047-7)
			開拓使所管の札幌農学校では、卒業後5年間は開拓使への奉職義務があった。佐藤昌介が提出した「入校証書」にも、同義務を遵守することが記されている。
I	1-(1)	3	教頭 W.S. クラークによる開校式演説 (1876年8月14日) 文書/大学文書館蔵 (札幌農学校簿書047-4)
			開校式当日の演説を佐藤昌介が翻訳したもの。佐藤のほか、大島正健 (1期生) らの翻訳も綴られている。
I	1-(1)	4	第2期生入学予定者名簿 (1877年7月2日) 文書/大学文書館蔵 (札幌農学校簿書051)
			1877年、札幌農学校は東京大学予備門、工部大学校 (いずれも東京所在) から主に生徒を募集した。東京大学予備門からは、太田 (新渡戸) 稲造、宮部金吾 (後に植物学者)、内村鑑三 (宗教思想家) ら11名が、工部大学校からは南鷹次郎 (農学者)、広井勇 (土木工学者) ら5名がいた。
I	1-(1)	5	太田 (新渡戸) 稲造の入学誓約書 (1877年6月) 文書/大学文書館蔵 (札幌農学校簿書062-3)
			太田 (新渡戸) 稲造は、同郷の先輩で慕っていた佐藤昌介の後を追って、東京から札幌農学校へ進学した。
I	1-(2)	6	新渡戸稲造が読んだ W. シェークスピア『ハムレット』 (1879年) 図書/附属図書館貴重資料室 (札幌農学校文庫)
			“Shakespeare's tragedy of Hamlet, Prince of Denmark,” 1879. 新渡戸稲造は赤・青鉛筆で下線を引き、書き込みをしながら読書した。殊に『ハムレット』には書き込みが多い。
I	1-(2)	7	新渡戸稲造が使用した『ユークリッド幾何学』 (1860年) 図書/附属図書館貴重資料室 (札幌農学校文庫)
			George R. Perkins “Plane and solid geometry,” 1860. 見返しに ‘Paul. I. Ota’ と太田 (新渡戸) 稲造の署名がある。
I	1-(2)	8	佐藤昌介受講ノート「植物生理学」 (1876年) ノート/大学文書館蔵
			札幌農学校1年級の佐藤昌介が、W.S. クラークの講義「Physiological Botany (植物生理学)」を受講して、清書したノート。クラークによる赤字訂正が見られる。クラークによる講義を受けたノートとして現存が確認されているのはこの1点だけである。

I	1-(2)	9	太田（新渡戸）稲造受講ノート「農学」（1881年） ノート／大学文書館蔵
			新渡戸稲造が、P.W.ブルックスの講義「Agriculture（農学）」を受講して、清書したノート。札幌農学校生は受講ノートを浄書して外国人教師の点検を受ける決まりだった。
I	1-(2)	10	寄宿舎の献立（1881年） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書104）
			札幌農学校は北海道産物を使用した洋食を奨励した。寄宿舎では夕食を洋食とし、主にエゾシカの肉などが食卓に上がった。
I	1-(2)	11	「開識社記録」（1878年11月2日） 記録台帳／大学文書館蔵
			開識社は農学校生が週1回開いた弁論大会。太田（新渡戸）は男女同一教育を主張したが、支持を得られなかった。
I	2-(1)	12	佐藤昌介「米国通信」を連載した『大東日報』（1882年4月4日） 新聞（複製）／大学文書館蔵
			アメリカ留学中の佐藤昌介は、政治・経済・農業等の現況を「米国通信」として新聞に連載して伝えた。原稿料は、日本に残してきた家族（妻の陽〔はる〕と長女の千代子）の生活費にあてたという。
I	2-(1)	13	佐藤昌介講義原稿「殖民史講義」（1891年1月） 原稿／大学文書館蔵（農業経済学教室資料）
			佐藤昌介は日本で最初に「植民学」を講義した。本資料はその最初期の記録。
I	2-(1)	14	佐藤昌介講義「殖民史」の受講ノート（1900年） ノート／大学文書館蔵
			第19期生半澤洵（後に応用菌学者）が佐藤昌介の講義を記録したノート。
I	2-(1)	15	佐藤昌介講義「農業経済論」の受講ノート（1904年） ノート／大学文書館蔵（川嶋一郎資料）
			第23期生川嶋一郎（後に畜産技師）が佐藤昌介の講義を記録したノート。
I	2-(1)	16	佐藤昌介の閻魔帳（1890 - 94年） 手帳／大学文書館蔵
			教官不足を補うため、佐藤昌介が専門の「農業経済学」のほか、「英文学」、「運輸交通論」なども担当した。閻魔帳には、学生の出欠状況、試験得点、試験問題が記されて、その横には得意の漢詩が詠まれている。
I	2-(1)	17	佐藤昌介講義「農業経済学」の受講ノート（1904年） ノート／大学文書館蔵（逢坂信彦資料）
			逢坂信彦（農業経済学専攻、1908年卒業）が佐藤昌介の講義を記録したノート。ノートの裏表紙には、佐藤昌介の後頭部が落書きされている。
I	2-(2)	18	札幌農学校本科・予科の試験日割（1893年） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書906）
			新渡戸稲造は本科で農政学・農業史・独逸語を、予科では古代史・近世史・英文学・英作文を担当し、講義でも多忙を極めた。

I	2-(2)	19	新渡戸稲造の出張帰還届 (1895年) 文書/大学文書館蔵 (札幌農学校簿書504)
			対雁・幌向への泥炭地視察出張の記録。農学校教師は北海道「開拓」「開発」にも深く関わる仕事をしていた。
I	2-(2)	20	新渡戸稲造書翰 (宮部金吾宛、1893年8月1日) 書翰/大学文書館蔵 (宮部金吾資料)
			在京中の同僚宮部金吾に宛てた書翰。外国人教師 A.A.ブリガム解雇や井上馨内務大臣の農学校視察などについて報告している。
I	2-(2)	21	T. カーライル『サーター・レザータス (衣裳哲学)』(1838年) 図書/附属図書館貴重資料室 (佐藤昌介文庫)
			Thomas Carlyle “Sartor resartus,” 1838. 多くの知識人が影響を受けたイギリスの評論家トーマス・カーライルの代表的著書。新渡戸稲造も講義等で学生たちに紹介した。
I	2-(2)	22	高岡熊雄の学生日記 (1892年) 日記/大学文書館蔵 (高岡熊雄資料)
			第13期生高岡熊雄は新渡戸の愛弟子、農業経済学専攻の第1期生である。日曜日には、新渡戸宅に赴いて聖書講義に出席していた。
I	2-(2)	23	新渡戸稲造講義「農政学」の受講ノート (1894 - 95年) ノート/大学文書館蔵 (高岡熊雄資料)
			高岡熊雄が新渡戸稲造の講義「農政学」を記録したノート。新渡戸稲造の札幌農学校離任後、後任教官には高岡熊雄になった。
I	2-(2)	24	新渡戸稲造講義「農学総論」の受講ノート (1895年) ノート/大学文書館蔵 (西田藤次資料)
			第17期生西田藤次 (後に農業技師) が新渡戸稲造の講義「農学総論」を記録したノート。
I	3	25	高岡熊雄の学生日記 (1892年) 日記/大学文書館蔵 (高岡熊雄資料)
			当時、本科1年級の高岡熊雄が、新渡戸稲造の子息 遠益 (トーマス) の死去と葬儀について記した懐中日記。
I	3	26	新渡戸稲造のポートレート (1896年) 写真/大学文書館蔵 (高岡熊雄資料)
			愛弟子の高岡熊雄に贈った札幌農学校教授時代の写真。この翌年、新渡戸稲造は療養のため札幌を離れる。
I	3	27	新渡戸稲造書翰 (宮部金吾宛、1898年8月20日) 書翰/大学文書館蔵 (宮部金吾資料)
			札幌農学校離任後、療養のため訪れたアメリカから宮部に出した書翰。一緒に当地の野草も送っている。
I	3	28	新渡戸稲造書翰 (高岡熊雄宛、1904年1月6日) 書翰/大学文書館蔵 (高岡熊雄資料)
			台湾総督府高官時代に高岡熊雄に送った書翰。新渡戸は台湾植民地経営の中心である製糖業を担当した。

I	3	29	新渡戸稲造書翰（高岡熊雄宛、1911年2月12日） 書翰／大学文書館蔵（高岡熊雄資料）
			第一高等学校長時代にキューバから高岡熊雄に送った葉書。
I	3	30	第2回日米交換教授 佐藤昌介のスクラップブック（1913 - 14年） 新聞切抜帳／大学文書館蔵（佐藤昌介資料）
			右は第1回日米交換教授であった新渡戸稲造がThe Japan Evangelist.に発表した佐藤昌介の紹介文。左は、第2回日米交換教授の佐藤昌介の講演模様を伝える現地新聞。
I	3	31	佐藤昌介の女子教育推進演説（1917年3月） 新聞切抜帳／大学文書館蔵（佐藤昌介資料）
			佐藤は広島女学校創立30年記念祝賀式祝辞の中で女子教育推進の必要を説き、東京女子大学の1918年4月開設や学監 安井哲についても言及した。 ～東京に於ては安江節子（誤植；安井哲子）氏が女子高師校を優退されて明年四月から新に起る女子大学に没頭せらる機運に達してゐる今日であるから一般に女子教育の向上を計らねばならぬ時期となつて居ります～
II	4-(1)	32	小谷武治旧蔵書の『北鳴学校記事』（1895年） 刊行物／附属図書館北方資料室蔵
			北鳴学校は札幌農学校予科に進学するための学校で、小谷も在学した。同校には札幌農学校予科教師が多く兼務し、新渡戸稲造は教頭を務めた。
II	4-(1)	33	小谷武治の札幌農学校予科入学願（1892年2月13日） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書877）
			小谷は予科5年級（予科では最上級）に入学した。学業履歴には、北鳴学校で修業した洋書を記載している。
II	4-(1)	34	小谷武治の修学旅行報告（1896年） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書522）
			同級生の芳賀亀太郎と連名で札幌農学校に提出した1896年秋の修学旅行報告。石狩地方の農家を調査し、大麻・亜麻・稲・麦などの生産状況を報告した。
II	4-(1)	35	小谷武治の卒業論文「北海道牧羊来景」（1897年） 卒業論文／農学研究院図書室蔵
			小谷武治は農学乙科（牧畜）を専攻し、南鷹次郎教授に師事した。
II	4-(1)	36	小谷武治『羊と山羊』（1912年） 図書／附属図書館貴重資料室蔵（南鷹次郎文庫）
			恩師南鷹次郎教授への献呈本。新渡戸稲造が序を寄せている。
II	4-(1)	37	小谷武治書翰（出田新宛、1911年7月5日） 書翰／大学文書館蔵（出田新資料）
			出田新は札幌農学校第11期生で農業技師となった先輩。小谷武治が鹿児島県立川辺中学校教諭を務めていた時期。
II	4-(1)	38	小谷武治書翰（出田新宛、1925年3月30日） 書翰／大学文書館蔵（出田新資料）
			小谷武治が北海道帝国大学予科教授の時期。

II	4-(2)	39	木村徳蔵の修学旅行報告書 (1901年7月6日) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書742)
			札幌農学校に提出した1900年夏の修学旅行報告。水戸における煙草栽培についての調査報告。
II	4-(2)	40	木村徳蔵の卒業論文「瓜哇北海道移民増減論」(1901年) 卒業論文／農学研究院図書室蔵
			木村徳蔵は農業経済学を専攻し、佐藤昌介に師事した。
II	4-(2)	41	木村徳蔵『両性問題と生物学』(1925年) 図書／大学文書館蔵 (牧野佐二郎文庫)
			木村徳蔵は卒業後は生物学を研究し、大学でも自然科学を教えた。
II	4-(2)	42	木村徳蔵・芳賀鋏五郎の身体検査票 (1897年、1900年) 文書／大学文書館蔵 (札幌農学校簿書563, 723)
			木村徳蔵、芳賀鋏五郎の札幌農学校在学時の検査票。
II	4-(2)	43	芳賀鋏五郎の寄宿舍退舎の辞 (1903年6月30日) 文書／大学文書館蔵 (恵迪寮資料00024)
			札幌農学校卒業による退舎の際の挨拶文。後日、後輩により「寄宿舍日誌」に貼附された
II	4-(2)	44	芳賀鋏五郎「台湾の園芸事業」(1915年) 図書／附属図書館蔵
			台湾総督府技師時代の著述。鳳梨(パイナップル)、苧蕉(バナナ)、荔枝(マンゴー)、木瓜(パパイヤ)、マンゴスチンを日本向け産品となる可能性を指摘している。(『明治園芸史』、1915年10月)
II	4-(2)	45	芳賀鋏五郎書翰 (宮部金吾宛、1904年9月7日) 書翰／大学文書館蔵 (宮部金吾資料)
			アメリカ留学中に恩師宮部に宛てた書翰。イギリスのキュー王立植物園で研修する意向を記している。
II	5-(1)	46	佐藤昌介の「門戸開放」演説 (1918年) 雑誌 (複製)／大学文書館蔵
			佐藤 (北海道帝国大学総長・農科大学長) は1918年7月、東京女子高等師範学校生等に向かって、北大は女性入学者を受け入れると演説した。(『北海道教育』第2号、1918年9月)
II	5-(1)	47	佐藤昌介の「門戸開放」演説 (1928年2月) 新聞 (複製)／大学文書館蔵
			佐藤 (北海道帝国大学総長) は、理学部開学を目前にした北海道帝国大学第10回記念式において「門戸開放」を唱えた。(1928年2月6日付『北海道帝国大学新聞』)
II	5-(1)	48	北海道帝国大学理学部入学志願者心得・入学試験日割 (1935年度) 文書／大学文書館蔵 (帝大簿書00367)
			理学部は第一次募集(高等学校、予科卒業者)で定員が満たない場合に限り、第二次募集を実施し、女子高等師範学校、女子専門学校、中等教員免許状所有者に受験を認めた。

II	5-(1)	49	理学部数学科入学試験問題（1935年度） 文書／大学文書館蔵（帝大簿書00367）
			数学科入学試験は、数学、外国語（英語・ドイツ語・フランス語から1科目）であった。
II	5-(1)	50	理学部数学科への女性の初入学を伝える大学新聞（1935年） 新聞（複製）／大学文書館蔵
			1935年4月16日付『北海道帝国大学新聞』。結城玉江（1934年東京女子大学卒業）が理学部数学科に入学、数学科では初の女性入学者であった。
II	5-(2)	51	小林よしの理学部入学を伝える大学新聞（1937年） 新聞（複製）／大学文書館蔵
			1937年4月27日付『北海道帝国大学新聞』。上中雪（日本女子大学出身）と共に、小林よし（1937年東京女子大学卒業）が理学部数学科に入学した。
II	5-(2)	52	卒業証書授与式「読上簿」における渡邊雅（1943年9月） 文書／大学文書館蔵（帝大簿書00026）
			渡邊雅（1937年東京女子大学卒業）は1941年4月理学部数学科に入学、1943年9月25日卒業証書授与式にて理学部数学科代表として読み上げられた。
II	5-(2)	53	小林よしの論文と研究業績評価（1941年） 雑誌（複製）／大学文書館蔵
			小林よしが指導教官の守屋美賀雄と共に発表した整数論分野の論文（1941年）。『科学』第11巻第12号（1941年）において彌永昌吉より高い評価を受けた。
II	5-(2)	54	桂田芳枝の論文（1951年） 雑誌／附属図書館蔵
			『北海道帝国大学理学部紀要』Ⅰ．数学 第12巻において、同誌で初めて女性卒業者が執筆した論文が掲載された。
II	5-(2)	55	大久保多津のポートレート（1951年） 写真帖／大学文書館蔵
			『東京都立富士高等学校第三回卒業記念』（1951年3月）。大久保多津（1937年東京女子大学卒業）は1945年理学部数学科に入学した。1948年卒業後は高校の数学教諭として教壇にたった。
II	5-(2)	56	桂田芳枝の北海道大学理学部教授昇任記事（1967年） 雑誌／大学文書館蔵
			『北大時報』第164号（1967年11月発行）。北大初の女性の教授が誕生した。

補遺	57	佐藤昌介筆墨 (1928年夏揮毫)	軸装墨蹟／大学文書館蔵
		東京英語学校・札幌農学校を通じて同級生であり親交の深かった内田瀨に、W.S.クラークの島松別離について詠んだ漢詩を贈った墨蹟。 泥路悠々騎馬進 東郊四月送師時 温顔惜別征鞍上 一片訓辞百代垂 昭和戊辰仲夏為 内田老兄清囑録旧作 琢堂農人昌 [読み下し文] 泥路 悠々として 騎馬進む 東郊 四月 師を送るの時 温顔もて惜別す 征鞍の上 一片の訓辞 百代に垂る	
補遺	58	新渡戸稲造筆墨 (1931年)	軸装墨蹟／大学文書館蔵
		1931年5月16日、国際連盟顧問の新渡戸が国際連盟学生支部の招待講演(札幌)へ向かう途中、函館駅鉄道構内で講演した際に同駅駅長佐々木正之に贈ったと考えられる墨蹟。 山深く何かいほりを結ふべき こころの中に身はかくれけり 稲造	

4-2. 陳列パネル目録

I	1-(1)	P1	東京英語学校生徒時代 (1876年7月)	写真／附属図書館北方資料室蔵
			右から佐藤昌介 (19歳)、新渡戸稲造 (14歳)。佐藤の東京英語学校卒業を記念して撮影。	
I	1-(1)	P2	札幌農学校開校日 (1876年)	写真／附属図書館北方資料室蔵
			左奥は講堂 (後の北講堂)、手前は寄宿所 (後の寄宿舎)。	
I	1-(1)	P3	演武場開業式 (1878年10月16日)	写真／附属図書館北方資料室蔵
			第1～3期生と教職員。生徒中列左から6番目が新渡戸稲造、14番目が佐藤昌介。中央椅子に座るのは調所廣丈校長。	
I	1-(2)	P4	第1期生 佐藤昌介の回想「西洋式生活」	典拠：『文武会会報』第65号
			北海道への渡航は品川より玄武丸 (凡一千噸) に搭乗する事となつた…東京より来れる我れ等学生は、恰も札幌に洋行せるかの感があつた。即ち衣食住は凡て洋式で、授業も外国教師であつた、邦語の教授は更に無かつたのである。寄宿舎内では凡ての必要品を支給せられ、洋食は朝夕二度、牛肉はなかりしも鹿肉は甚だ多く、其のステーキは飽くまで貪つて居た。初めての冬を明治九年に暮したるが、クラーク先生の活潑なる野外の採集等に同伴し、殊に雪中手稲登山の如き、当時の開拓使の役人を驚かしたのである。	

I	1-(2)	P5	<p>第1期生 黒岩四方之進の回想「佐藤昌介君の御国言葉」</p> <p>典拠：『文武会会報』第65号</p>
			<p>（佐藤昌介）博士は在校当時より学者風にて余輩の如く野外に跳回はるよりも寧ろ室内に静に読書するを好まれ…級中の年長者にて頗る老成の風あり…始終開識社の社長に推され其発展に大に貢献せらる又討論題の如きはいつも適切なるものを提出し討論の趣味を喚起せしめたり、唯博士の「ザジズゼン」音の不明瞭なるより時に他のワンバク者より苦しめられたることあり、小生もその苦しめたる一人に洩れず今日に至るも之れを思へば気の毒の感に堪へず…博士は在校当時より囲碁を好まれ其頃幹事たりし森源三氏杯と闘戦し「スマツタ…」の声を聞くこと珍敷からざりし</p>
I	1-(2)	P6	<p>第2期生 新渡戸稲造の回想「初めてのアルバイト」</p> <p>典拠：『蕙林』第12号</p>
			<p>学生の一大富源は所謂手業料にてぞありし。これぞ今日の農業実習にして、担任者は農学教師ブルックス氏…氏は米国風の思想をいだき労働は相当の報酬を与ふべしと主張し、学生毎週両度つゝ出て手業の課を受くれば農園の爲めには幾分かの労働をなすこと故、壹時間五銭つゝの割合を以て月末に勘定をする事に定めたり。我等安政前後の出生なれば士族風の気象も少しは保存せるを以て、金銭を払はるゝ杯甚た賤敷様に思ひたれば、胸中はくてたまらねど口には受領可否に関し討論せる…然るに一度壹円以上の金を掌に握り「これぞ吾か額にかきたる汗の賃銀なり」「これだけあれば五度や拾度蛇足に通ふも苦しからじ」と心に悟開らきたる後は、誰壱人として手業料の貴賤を論する者なく…課業外にも手業を願ひ出る輩さへ頭はれたり。</p>
I	1-(2)	P7	<p>第2期生 内村鑑三の回想「みんな集まれ、祝宴だ！」</p> <p>典拠：『余は如何にして基督信徒となりし乎』</p>
			<p>回心せる新入生一同相集り…祝宴を催した…エドウィン（足立元太郎）は彼の発見し得る最大の南瓜を獲得する為に畑に遣られた、多量の大根、キャベツ、トマトも共に獲得し来る可し。我等の植物学者フランシス（宮部金吾）は蒲公英の葉が何処にあるかを知つてゐた、余は彼の胸乱を携へて其に一杯此の美味なる植物を採集するために遣られた。熟練せる化学者にして且つ常に料理学の理論と実際の第一人者であつたフレデリック（高木玉太郎）は、彼のアルカリと塩と砂糖とを以て用意を整へてゐた。ヒュー（藤田九三郎）は彼等の目的の為に最高熱度の火を燃焼せしむる事によつて、彼の数学と物理学の蘊蓄を提供した。文学的のパウロ（新渡戸稲造）は、何時でも斯ういふ時には怠け者であつた</p>
I	2-(1)	P8	<p>アメリカ留学中の佐藤昌介（1886年）</p> <p>写真／大学文書館蔵</p>
			<p>右端が佐藤昌介、左端が新渡戸稲造。佐藤昌介は1880年札幌農学校を卒業後、開拓使御用掛・農商務省御用掛として勤務していたが、1882年職を辞し、私費で渡米した。その後、1886年6月ジョンズ・ホプキンス大学を卒業し、帰国後の12月母校の教授となった。</p>
I	2-(1)	P9	<p>農業経済学教室の初期メンバー（1895年）</p> <p>写真／大学文書館蔵（高岡熊雄資料）</p>
			<p>左端が佐藤教授、右端が新渡戸教授。1894年、札幌農学校は実科演習（ゼミナール）方式を採用入れて、本科3～4年級の学生は専攻分野を選び、各専攻の教室で専門の指導を受けた。写真は、農業経済学を専攻した13～14期生。</p>

I	2-(1)	P10	<p>第7期生 石川貞治の回想「洋行帰りの佐藤先生」</p> <p>典拠：『文武会会報』第70号</p>
			<p>あの頃の平常の服は黒の雲齋に毛氈の裏をつけて、帽は味噌こしの様な恰好で、妙な事にはズボンだけが黄鳥茶の小倉でした、小倉は下駄の緒にするので下駄の緒のズボンと云ました、其れが長い間に濡れたり茶やインキがこぼれると其れが一々形がつくのでよごれるのよごれないのと実にステキなものでした、そしてあの頃は藤の椅子でしたが其れに尻が喰込むでズボンに穴があくので『オイ尻に眼鏡々々』と云つて居りました、未来のビスマーク、モルトゲも皆此んな有様でした。其所へ佐藤さんが外国から帰つて来られて、…とにかく当時の黒い山高帽にモーニングと云ふ服装は此の尻の眼鏡とよいコントラストでした。</p>
I	2-(1)	P11	<p>1910年卒業生 末光信三の回想「佐藤先生の西洋史講義」</p> <p>典拠：『札幌同窓会誌』復刊号</p>
			<p>予科時代を通じて先生の数が足りなかったためか、えらい先生が専門以外の語学なり歴史なりを講じて下さったので、吾々としては大いなる特権として誇りに感じたものである。佐藤昌介先生からは西洋歴史と、新渡戸先生著の「武士道」を英語の教科書として学んだのである。歴史の時間には常に数冊の外国書を教壇上にならべて、代わるがわるそれに目をおして講義をすすめられ、その荘重なる口調と態度とは、いつのまにか若いものの心を魅し去ったのである。また英語には化学の大島金太郎先生が、沙翁のジュリアス・シーザーを…、植物の宮部金吾先生からは十九世紀の予言者といわれたラスキンの書を学んだ。</p>
I	2-(2)	P12	<p>第16期生 佐々茂雄の回想「洋行帰りの新渡戸先生」</p> <p>典拠：「故佐々茂雄先生自叙伝」</p>
			<p>明治二十四年三月新渡戸先生が予科に帰つて来られました。先生はアメリカ風を吹かせ、英文学を担当（予科と本科とも）されていましたが、教科書としてはアンダーウッドの英文学を使いました。…この本のお陰で自分も英語の力がついたと思いました。…新渡戸先生が帰られたのと同前後して、杉野目文蔵先生がコロンビア大学を卒業されて工学科に来られ、…工学科の主任教授廣井勇先生が帰国されたため農学校の予科がますます活気づきました。…また先生のお宅で英語で聖書の講義をされていましたが二、三十名の学生が集っていました。私も時々参加させていたゞきました。</p>
I	2-(2)	P13	<p>第13期生 高岡熊雄の回想「新渡戸門下 第1期生」</p> <p>典拠：『明治天皇聖蹟時計台建物修築記念誌』</p>
			<p>明治二十七年に校則が改正され、学課もかはつたので、これまで農学科の生徒は皆同じ講義を聞き、研究を続け来たのであつたが、それからは三年と四年とに学科が分けられ、私は農学、農政の方を勉強した。(演武場の)階下の教室に続く右側の小さい教室が経済の研究室、演習室となり、私達はこゝで新渡戸先生の教を受けたのである。この「演習」といふ言葉は、一寸軍隊の演習といふのと間違れ易いが、学問の実際研究にこの言葉をあてはめて用ひたのは、おそらく我々が最初であろう。その後この演習の制度は、方々の大学でも実施される様になつたが、先鞭をつけたのは、札幌農学校であつた。</p>

I	2-(2)	P14	第18期生 伊藤清蔵の回想「遊戯会での新渡戸先生」 典拠：『南米に農政三十年』
			当時札幌農学校の遊戯会は、札幌年中行事中最も華やかな一つ…ことに学生の最も血をわかせた競技は百メートル競走、半哩競走及び一哩競走であり、兵装競走なども多くの興味を以つて見られた…（私も）一ヶ月半の熱心な練習の後、遊戯会の当日には十数競技の何一つにも参加せず満を持して最後の半哩競走を待つたのである。“ズドン”といふ一発を合図に夢中になつて走つた私は、ダンダンと十数名の参加者を抜いて最後の一人に追いつくとあせつた時、横合ひより親友の平沢真が来て共に走つて呉れた時は本当に嬉しかった、それにも増して私の喜んだことはいよいよ決勝点に近づいた時である、新渡戸先生が走つて来て私に「二等！」と呼ばれたことであつた。
I	3	P15	新渡戸稲造と予科生徒たち（1897年6月） 写真／大学文書館蔵
			有島武郎、森本厚吉ら19期生が予科卒業記念として、敬慕する新渡戸稲造教授を囲み記念撮影した。
I	3	P16	新渡戸稲造と同窓生たち（台湾恒春、1905年） 写真／大学文書館蔵（高岡熊雄資料）
			台湾総督府勤務時代。巨木ガジュマル前にて札幌農学校同窓生と共に。左より柳本通義（第1期生、台湾総督府恒春庁長）、新渡戸稲造。右2番目は高岡熊雄（第13期生）。
I	3	P17	新渡戸稲造のポートレート（視察中のベルリンにて、1902年） 写真／大学文書館蔵（高岡熊雄資料）
			愛弟子の高岡熊雄へ贈ったポートレート。
I	3	P18	新渡戸稲造のポートレート（1907年） 写真／大学文書館蔵（高岡熊雄資料）
			愛弟子の高岡熊雄へ贈ったポートレート。
I	3	P19	第2回日米交換教授として滞米中の佐藤昌介（1914年） 写真／大学文書館蔵（佐藤昌介資料）
			佐藤昌介は、第2回日米交換教授として1913～14年、全米各地の大学等で巡回講演をした。訪問先では、日本の女子高等教育の近況についても言及するとともに、アメリカにおける大学の男女共学の現況を視察した。
II	4-(1)	P20	札幌農学校第15期生卒業記念（1897年） 写真／大学文書館蔵
			前から2列目右3番目が小谷武治。 前列左から吉井豊造教授（農芸化学）、新渡戸稲造教授（農政学）、佐藤昌介校長（農業経済学）、宮部金吾教授（植物学）、南鷹次郎教授（農学）。
II	4-(1)	P21	新渡戸稲造を迎えた小谷武治（台湾台北にて、1909年1月24日） 写真／附属図書館北方資料室蔵
			札幌同窓会（札幌農学校農学科・工学科・本科卒業生の同窓会）による歓迎会。前列右2番目が小谷武治、中列右4番目が芳賀鋏五郎。

II	4-(2)	P22	木村徳蔵 (北鳴学校出身者と共に、1901年) 写真/大学文書館蔵
			札幌農学校第19期生中の北鳴学校出身者の集い。中列左端が木村徳蔵、中列右端に森本厚吉 (消費経済学者)、前列右端に星野勇三 (園芸学者) 等が見られる。
II	4-(2)	P23	第19期生 木村徳蔵の回想「有島武郎君がいた青春」 典拠：『泉』終刊有島武郎記念号
			札幌の予科時代から本科、殊に卒業の一二年前であつたか、君と森本(厚吉)君及び河野(孝太)君等と僕も、彼の新渡戸恩師の空屋に雑居して相撲や柔術の真似をやつたり、秋から冬にかけて毎晩の様に勉強の時間よりは遙に長時間、共にストーヴを囲み、庭園内から収穫した山なす苹果を食べながら騒いだこともあつた。…君の祖母君は…『武郎は私が丹誠して育てた子です』と…吾等の恩師新渡戸先生は『有島は深山の大木のやうな青年だ』と云はれたことがあつた。家庭での麒麟児と云ひ深山に育つた大木と云はれた君が、更に欧米に、札幌に、而して東京で樹齢か児齢を加へたのだから、君の人物に非凡性の色彩が濃厚であつたことは当然のことであつた。
II	4-(3)	P24	動植物修学旅行中の芳賀鋏五郎 (1901年) 写真/植物園蔵
			前列右2番目が芳賀、後列右3番目が宮部金吾教授 (植物学)、後列左2番目が原十太教授 (動物学)。
II	4-(3)	P25	佐藤昌介を迎えた芳賀鋏五郎 (台湾台北にて、1908年10月28日) 写真/附属図書館北方資料室蔵
			札幌同窓会による歓迎会。後列右4番目が芳賀。当時、台湾総督府の技術者として、札幌農学校卒業生が数多く滞台していた。
II	5-(1)	P26	佐藤昌介 (書齋にて、1930年代) 写真/大学文書館蔵 (佐藤昌介資料)
II	5-(1)	P27	北海道帝国大学理学部女性入学者一覧 (1930-45年度) 表/大学文書館製作
II	5-(1)	P28	女性入学者の出身校別円グラフ (理学部、1930-45年度) グラフ/大学文書館製作
II	5-(1)	P29	女性入学者の出身校別円グラフ (理学部数学科、1930-45年度) グラフ/大学文書館製作
II	5-(1)	P30	小林よし (1939年) 写真/大学文書館蔵
			1939年当時、理学部に在学していた女性たち。理学部数学科の小林よし (後列中央)、上中雪 (後列右端)、理学部物理学科の中山久子 (後列左端)、横田ゆりえ (前列左端)、添谷晃子 (前列右端)。
II	5-(1)	P31	渡邊雅 (1941年) 写真/大学文書館蔵
			渡邊雅、大杉富美子 (日本女子大学校出身) の入学を祝して、理学部数学科の女性たちが集った。前列左より桂田芳枝、大杉富美子、渡邊雅、後列左より上中雪、今井昌子。

II	5-(1)	P32	桂田芳枝（1943年）
			写真／大学文書館蔵
			池田百合子(日本女子大学校出身)の入学を祝して、桂田芳枝が呼びかけて、理学部数学科の女性たちが集った。前列左より今井昌子、桂田芳枝、後列左より上中雪、池田百合子。
II	5-(1)	P33	教壇に立つ大久保多津（1950-51年）
			写真／大学文書館蔵
			東京都立富士高等学校（前 第五女子高等学校）の数学授業風景。左側立姿の女性が大久保。大久保は理学部卒業後、教師として教壇に立った。